

都市の言語と大都市の言語

中島隆博

私はそこ「凱旋記念塔の遊歩廊広間」へ決して足を踏み入れはしなかった。かつて年老いた伯母の客間で出くわした本の絵を思い出させかねない描写に、またぞろそこで出くわすのを恐れたのだった。それはダンテの「地獄篇」の豪華本だった。^①

1 ベンヤミンと言語

「言語一般および人間の言語について」(一九二六年)の中で、ヴァルター・ベンヤミンは万物が言語に関与しているとした上で、人間独自の働きを、事物に名を与えることによって、「事物の言語を人間の言語へ翻訳すること」^②だと考えた。それは自らを伝達しようとする事物の声なき声を聞き取ることである。この働き

(1) ヴァルター・ベンヤミン「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」、『ベンヤミン・コレクション』3、四八四頁。

(2) ヴァルター・ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」、『ベンヤミン・コレクション』1、二六頁。

は、詩人に特有のものではなく、人間一般の存在理由である。「この自然「自然は話せないこと」を救うためにこそ、自然のなかに、通常思われているところとはちがってひとり詩人のみならず、人間一般の生と言語が存在しているのだ³」。ここには、ベンヤミンがしばしば言及するヨーハン・ゲオルク・ハーマンの言語論がこだましている。ハーマンは言う。

「語りたまえ、我、汝をば見まつらんがため。」——この願いは創造によって充たされた。創造とは、被造物を通じての被造物への語りかけである。「げに、この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に知らすがゆえに。」その合言葉の駆けるや全風土に遍く地の果てに及び、いかなる方言にありてもその声は聞かれる——しかし、責が（我々の内ないし外の）いづれに存するにせよ、自然のうちには乱れに乱れた詩句、また「切り刻まれた詩人の肢体」の他、何ものも我々の用のために残されていない。それらを拾い集めるのは学者に、それらを解釈するのは哲学者に、それらを模倣するのは——あるいはより大胆に語って——それらを組み上げるのは詩人に、各々委ねられた職分である。

語りとは翻訳である。——天使の言葉から、人間の言葉へと。すなわち、思想は言葉に——、事物は名称に——、形象は記号へと訳出される。記号とは、詩的、つまり非可訳的なもの、歴史記述的、つまり象徴のないし象形文字的なもの、——また哲学的、つまり特徴叙述的なものでありうる⁴。

「語りとは翻訳である」このハーマンの言明の前では、哲学者も詩人も翻訳の「委ねられた職分」としてあるにすぎない。その延長線上で、ベンヤミンの「翻訳者の使命」（一九二五年）を讀解し直してみよう。「翻訳者の使命」と「詩人の使命」を厳密に区別すべきだとして、ベンヤミンは次のように述べる。

翻訳の志向は、創作の志向とは何か別のものを、つまり、他言語で書かれた個々の芸術作品から出発してひとつの言語全体を目指すばかりでなく、それ自身別の志向でもある。すなわち、詩人の志向は、素朴な、始源的な、直感「直観」的な志向であり、翻訳者の志向は、派生的な、究極的な、理念的な志向なのである。なぜなら、多数の言語をあの一つの真なる言語へと統合するという壮大なモチーフが、彼の仕事を満たしているのだから。⁽⁵⁾

翻訳者は、創作する詩人とは異なり、言語を救済しなければならない。「異質な言語の内部に呪縛されているあの純粹言語をみずからの言語の中で救済すること、作品のなかに囚われているものを言語置換〔改作〕のなかで解放することが、翻訳者の使命にほかならない。」⁽⁶⁾とはいえ、その救済は容易なものではない。翻訳者が対峙しているのは、複数の生き存える D.berleben 言葉であり、別の時間性である。したがって、その他なる言語のなかで志向されているものを捉えるには、翻訳者は隔時的な diachronic 感覚すなわち「歴史のメシア的終末」⁽⁷⁾への感覚を持たなければならないからである。⁽⁸⁾

(3) 同、三三頁。なお、「」による強調は原著者により、「・」による強調は中島による。

(4) ヨーハン・ゲオルク・ハーマン『北方の博士・ハーマン著作選』上、一一九―一二頁。

(5) ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」、『ベンヤミン・コレクション2』、四〇―四〇二頁。

(6) 同、四〇七―四〇八頁。

(7) 同、三九八頁。

(8) たとえば次の箇所を参照のこと。「自分自身の時代が以前のある特定の時代と出会っている状況布置を、彼は把握する。そのようにして彼は現在の概念を、メシア的な時間のかけらが混じりこんでいる〈現在時〉として根拠付けるのである」(ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」、『ベンヤミン・コレクション1』、六六―四頁)。

では、翻訳者の使命は「近代」において果たされたのだろうか。アレゴリカーにとって「歴史のメシア的終末」は、未来ではなく、「いま・ここに」において実現されるものであった。そして、ボードレルにとっての「近代」は、一方で未来を欠き、他方で古代と照応するアレゴリー的な「現在時」であった。とはいえ、十九世紀の翻訳（詩を含む）の言語と、それ以前の翻訳の言語はその条件を異にしている。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

確認しておく、ベンヤミンにとって「翻訳の言語」は「自身の言語の朽ちた柵を打ち破る」ことで新たに見いだされるべきものであった。⁽¹¹⁾そこでは「ドイツ語の限界を拡大した」人々の名が上げられていたが、このことにまず自覚的に向かったのはダンテであるだろう。ダンテは、『神曲』を書く以前に、『俗語詩論』(一二三〇四年)を書き、新たな都市の言語について論じていた。

イタリア人の営みのなかでなによりも高貴なしるしであるところのものは、イタリアのいかなる都市にも属さずすべての都市に共通なものなのである。そうしたしるしのなかにこれまで追い求めてきたかの俗語がみとめられるのであるが、それはどの都市にも芳香をはなちながら、そのいづれにも生息しているわけではない。しかしながらある都市では、他の都市よりもひとときわ香りがたかいということはあり得るのである。⁽¹²⁾

ダンテにとって、詩の言語にふさわしい高貴な俗語は都市の言語である。それは「いかなる都市にも属さずすべての都市に共通」だと述べられるように、特定の都市に根差すという自然さを還元した上で見いだされる、新しい都市の言語であった。それは、子供が模倣を通じて学び取る言語活動に根差しながら、それを篩

にかけて還元することで見いだされる都市の言語なのだ。この都市の言語に自然主義は認められない。

そして、ベンヤミンにとつて、シャルル・ボードレルはダンテを継承する者であった。『パサーージュ論』に残されたメモを見ると、ベンヤミンがこの二人の関係を、諸家の言葉から拾い上げていたことがわかる。その中からアルベル・ティボーデから引用した一節を見ておこう。

ボードレルの哲学的で文学的な……カトリシズムには、神と悪魔の間に占める……中間的な場が必要だった。『冥府』というタイトルは、ボードレルの諸詩篇のそうした地理的な位置づけを示すものであり、これによって、ボードレルが定めようとした各詩篇間の順序が一層はつきりと分かるようになったのである。その順序とは、ある旅の順序、まさしく第四の旅、つまり、『地獄』『煉獄』『天国』を巡るダンテの三つの旅の後に来る第四の旅の順序なのだ。フィレンツェの詩人がパリの詩人に引き継がれているというわけである。⁽¹⁴⁾

(9) たとえば次の箇所を参照のこと。「ボードレルはベシミストではない。なぜなら、彼にとって未来はタブーだからである」(ヴァルター・ベンヤミン「セントラルパーク」(一九三八―三九年)、『ベンヤミン・コレクション1』、三六〇頁)。

(10) たとえば次の箇所を参照のこと。「古代と近代の照応がボードレルにおける唯一の構成原理的な歴史構想である。それは弁証法的な歴史構想を含むというよりも排除している」(同、三九四頁)。

(11) それは、中世のアレゴリーと近世のアレゴリーの区別(ヴァルター・ベンヤミン「アレゴリーとパロック悲劇」、『ベンヤミン・コレクション1』、二〇三頁)に続く、近世のアレゴリーと近代のアレゴリーの区別の問題でもある。「パロックのアレゴリーは屍体を外側だけから見ている。ボードレルはこれを内側からも見る」(ヴァルター・ベンヤミン「セントラルパーク」、『ベンヤミン・コレクション1』、四〇五頁)。

(12) ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」、『ベンヤミン・コレクション2』、四〇八頁。

(13) ダンテ・アリギエーリ『ダンテ俗語詩論』、六一頁。

(14) ヴァルター・ベンヤミン『パサーージュ論II』、『3.1』、一四頁。

「フィレンツェの詩人」を引き継ぐ「パリの詩人」としてのボードレール。もしこの系譜学に従うのであれば、ボードレールもまた都市の言語を継承したことになる。

しかし、フィレンツェを追われて来たイタリアの諸都市を亡命したダンテと異なり、ボードレールはパリに戻ってパリのなかで亡命したのである。すでにパリは一つの都市ではない。十九世紀の「近代」とそれ以前が異なるのは、パリが「大都市」であるということだ。では、都市の言語ならぬ大都市の言語のあり方は何であるのか。

3 大都市の言語——亡命について

パリのなかでの亡命者とはフラヌール（遊歩者）である。

憂鬱によって養われているボードレールの天分は、アレゴリーの天分である。ボードレールにおいて、はじめて、パリが抒情詩の対象となる。この文学は郷土文学ではない。都市を捉えるアレゴリー詩人のまなざしは、むしろ疎外された「他郷者になった」人のまなざしである。それは遊歩者のまなざしである。遊歩者の生活形式は、のちの大都市住民の悲惨な生活形式を、まだ仄かな宥和の光で包んでいる。遊歩者はまだ大都市への、そして市民階級への敷居（過渡期、移行領域）の上にいる。彼は、そのどちらにもまだ完全には取りこまれていない。そのどちらにも彼は安住できない。彼は群衆のなかに隠れ家を求め⁽¹⁶⁾る。

フラヌールがまだ可能であった十九世紀は、パリはまだ「大都市」として完成していないし、ボードレール

もなおアレゴリー詩人として、群衆を通してパリを見ることができた。遅れてきたアレゴリカーとしてのボードレールは、「近代の終末ののち、近代自体がいつか古典時代になりうるかどうか」という問いにも諾と述べることができた⁽¹⁸⁾。要するに、ボードレールにとっては、大都市の言語がなおも可能であった。それがダンテの「都市の言語」と異なるのは、「大都市」というイメージそのものを詩の対象としたことである。

ボードレールの文字のもつ無比の特徴は、女と死のイメージが、第三のイメージ、すなわちパリのイメージのなかで浸透しあっていることである。彼の詩におけるパリは沈める都市しかも地中というよりは水中に沈める都市である⁽¹⁹⁾。

その大都市であるパリは、しかし、近代の進歩を体现する力強い場所であってはならない。それは、進歩に反旗を翻し、過去を哀悼する、脆さとしての大都市であった⁽²⁰⁾。

(15) たとえば次の箇所を参照のこと。「大都市を解く鍵のひとつとしての亡命」(ヴァルター・ベンヤミン「セントラルパーク」、『ベンヤミン・コレクション』、三八三頁)。

(16) ヴアルター・ベンヤミン「パリ——十九世紀の首都」、『ベンヤミン・コレクション』、三四六頁。

(17) たとえば次の箇所を参照のこと。「アレゴリー的な直観(物の見方)」は十七世紀においては様式を形成する力をもっていたが、十九世紀にはもはやそうではなかった。ボードレールはアレゴリー詩人として孤立していた。彼の孤立は、ある点から見れば、遅れてきた者の孤立であった(ヴァルター・ベンヤミン「セントラルパーク」、『ベンヤミン・コレクション』、四一四—四一五頁)。

(18) ヴアルター・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」(一九三八年)、『ヴァルター・ベンヤミン著作集6 ボードレール』、一三〇頁。

(19) ヴアルター・ベンヤミン「パリ——十九世紀の首都」、『ベンヤミン・コレクション』、三四八頁。

(20) 同様の記述は、「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」にもある。「過去への哀悼と未来への絶望が、かれらには共通してい

『悪の華』が今日まで見出してきた絶え間ない反響は、大都市がそこで史上はじめて詩のなかに登場したことによって獲得したある面と深く関連している。それは最も意外な面である。ボードレールが彼の詩のなかでパリを喚起するとき、そこに共振しているもの、それはこの大都市の虚弱さと脆さなのである。「朝の薄明」におけるほどそれが完璧に暗示されたことはなかったのではないか。⁽²¹⁾

ところが、いまや大都市は、百貨店が乱立し、ガス灯ではなく電灯に煌々と照らされるその先にある。大都市のなかにボードレールが見た脆さ(女性、動物、そして老人)がアレゴリーになることはない。性的なるもの・動物的なるもの・老いのいづれもが脆さを失い消尽した現在の大都市において、いったい翻訳としての詩の言語は如何なるものでありうるのだろうか。そこで、過去が救済されることはないだろう。もはや過去への通路がないからだ。古典回帰という現象はあちこちにある。しかし、それは過去の過去性を扱うことではない。それは古典古代との関係への隔時性の感覚を欠いているからだ。あるいは、終末への感覚を欠いていると言ってもよい。それが扱うのは、「強さ」であり、過去無しに「永遠回帰」し続ける現在にすぎない。上海、ニューヨーク、そして東京。この三つの大都市において、いま亡命は如何にして可能なのか。あるいは、いまの亡命のあり方とは何であるのか。これもまた、大都市の言語への問いの一つである。

る。近代を最終的に、もつとも内奥から古典古代に結ぶべきなは、このかよわさなのだ。パリは、どこであれ『悪の華』に出現するかぎりでは、このかよわさのしるしを帯びている。「中略」大都市の脆さを把握したことが、かれがパリについて書いた詩が長くもちこたえていることの、根源にある(『ヴァルター・ベンヤミン著作集6 ボードレール』、一三二―一三四頁)。

(21) ヴァルター・ベンヤミン「セントラルパーク」、『ベンヤミン・コレクション』、三八七―三八八頁。

参考文献

- ヴァルター・ベンヤミン『ヴァルター・ベンヤミン著作集 6 ボードレール』（新編増補版）、川村二郎・野村修編集解説、晶文社、一九七五年
- ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論Ⅱ』、今村仁司・三島憲一訳、岩波書店、一九九五年
- ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』、浅井健二郎編訳、久保哲司訳、ちくま学芸文庫、一九九五年
- ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』、浅井健二郎編訳、三宅晶子・久保哲司・内村博信・西村龍一訳、ちくま学芸文庫、一九九六年
- ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 3 記憶への旅』、浅井健二郎編訳、久保哲司訳、ちくま学芸文庫、一九九七年
- ダンテ・アリギエーリ『ダンテ俗語詩論』、岩倉具忠訳註、東海大学出版会、一九八四年
- ヨーハン・ゲオルク・ハーマン『北方の博士・ハーマン著作選』上下、川中子義勝訳、沖積舎、二〇〇二年